



よつば会だより

2018年12月号

発行:NPO法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

我が家の庭に一本ある柚子の木の実が黄色く色づいてきました。実の大きさはピンポン玉ぐらいですが300個あまりの実をつけています。木の手入れや肥料やりはほとんどやっていないのですが、毎年多くの実をつけてくれます。小粒の実でも香りは強く、絞ると果汁がしたりります。料理に使うだけでなく、半分に切った実を風呂に浮かべて香りを楽しみます。ゆったりと湯に浸かりながら柚子の香りをかいていると、心の中のわだかまりが溶けていくようです。そして、こんな香りをもたらしてくれる大地の恵みに感謝の気持ちも湧いてきます。



「障害者週間」尾道福祉大会が開催されます



第25回「障害者週間」尾道福祉大会が、12月8日(土)に開催されます。場所は総合福祉センターで、13時開会です。大会のメインとなる講演は、チェロソロスタンディング奏者の吉川よしひろさんが「可能性を信じて誰もが人生の主人公」という演題で行います。吉川さんは聴覚障害のある方ですが、「チェロ演奏」と「障害者ゆえに見えない差別を受けてきた体験談」を合わせた講演活動を日本各地で行っています。障害者に対する差別の問題を考える機会でもあり、同時にチェロの演奏を楽しむことができるでしょう。会員の皆様の多数の参加を期待しています。



～1月の家族教室の“親なき後問題”で～ 西川浩司さんに講演を依頼



来年1月の「よつば会家族教室」を1月26日(土)に行います。会場はいつも通りの市民センターむかいしまで、13時30分開会です。今回は社会福祉法人尾道のぞみ会ソーシャルワーカーの西川浩司さんに講演してもらいます。内容は、精神障害者の“親なき後問題”を中心に話してもらうことをお願いしています。よつば会から、話してもらいたいことの例として「成年後見制度を利用したいが、手続ができそうにない」、「金銭的に生活できなくなったときに、SOS が出せるところ」、「障害福祉サービスの利用が支援者につながるようになると思うが、利用を受け入れない当事者にどう説得すればよいか」を伝えています。他にも何点か伝えています。話す内容は西川さんにお任せするとしているので、伝えていることを取り上げてもらえないこともあるかもしれませんが、親なき後問題に対して、西川さんの体験を通しての具体的な話を聞くことができることを期待しています。親なき後への不安は、多くの当事者・家族が抱えています。しかし、その不安を解消するための行動がなかなか伴わない人もいないのでしょうか。そのような方が今回の講演に参加して、少しでも不安を解消するための行動の元気を見出してもらえたらと思っています。



当事者への対応、親も柔軟に考えよう



「みんなねっと」誌11月号に見つけた文章です。「統合失調症にも認知症と同じような事情があります。原因ははっきりしませんし、どんなに薬を工夫しても悪化する人があり、人によって効く薬が違っています。ですから、支援する人は自分の常識で決めつけるのではなく、本人ががんばっていることを認めたくえで、困っていることのうち何をどう助けられるかを柔軟に考えることとなります」この文章は医師が認知症の方に対応した内容を書いた記事の一部です。この文章の中の「支援する人」は医師をさしていると思いますが、親も当事者にワンパターンの対応になっていると思えることから、それを親に置き換えても通じる文章だと思いました。

11月の活動報告

- 11日 当事者との交流会 (サロンよつば)
24日 よつば会家族教室 (市民センターむかいしま)
*「サロンよつば」は水・土にオープンしています
AM10:00～ 気軽にお越しください

12月の活動予定



- 08日(土) 障害者週間尾道福祉大会 (福祉センター)
09日(日) 当事者との交流会 (サロンよつば)
14日(水) 家族の SST (市民センターむかいしま)



～分かりやすく患者・家族・支援者とともに作成～ 「統合失調症薬物治療ガイド」が発行されました



メンタルヘルスマガジン「こころの元気プラス」誌の11月号の特集は「自己選択に役立つ治療ガイドライン」というテーマの記事でした。記事の内容は日本神経精神薬理学会がこれまでに作成していた、医師向けの「統合失調症薬物治療ガイドライン」が、患者や家族にとって理解しにくいものであったため、このたび分かりやすくした「統合失調症薬物治療ガイド」を、患者・家族・支援者とともに作成したというものです。

一般的にガイドラインとは、ある事をするにあたってどのような進め方がよいかを示したもので、「統合失調症薬物治療ガイド」(以下「ガイド」とする)は、統合失調症患者に対して薬物治療を行っていく際に、このような症状にはどの薬をどの量で与えていくのが適切かなどを示しているものとなるでしょう。今回の特集のなかでは「ガイド」の具体的な内容は示されていなくて、「ガイド」をどのように使っていくことができるかを中心に記されています。そして、今後の「こころの元気プラス」誌で「ガイド」に関して分かりやすい解説を連載するということでした。

「ガイド」には統合失調症の治療に使われる薬について詳しく記されているようです。記事の中に「医学用語の解説もあり、薬剤名も『一般名』に続けて『商品名』の併記で分かりやすくし、商品名で引ける薬剤リストもあります」、「統合失調症の初発時に好ましい抗精神薬はどれか、再発時には薬の増量と切り替えのどちらがよいかなどの疑問に対して、推奨されている薬物治療の方法が書かれています」という表現がありました。また、「ガイド」を読んだ当事者の感想として、「こういう副作用があるんだと、薬についてほとんど無知だったのが分かってきてよかったし、先生とそういう話ができただけでもよかったです。この病気になると理解力が乏しくなり、何がなんだか分からずに医師に出された薬を飲んでいてのを防ぐためにも、すごくいいことだと思いました。当事者が自分の病気をよく知ることは、大切なことですから」という文章もありました。

このように「ガイド」は統合失調症の薬に関して、いろんな状況に対しての使い分けや、疑問に答えることも記載されているようです。薬についてのさまざまな知識を持つ上でいい学習材料のように思えます。そして、その知識を持って医師と話し合うことを勧めています。

医師と話し合う前に注意することも述べられています。「ガイド」は統合失調症の患者さんを対象にしています。現実には、統合失調症らしいけれども統合失調症とは言い切れない患者さんも少なくなく、このような患者さんには「ガイド」に書いてあることが当てはまらないこともあり、「ガイド」どおりの治療だけが正しいものではないということです。

この「ガイド」のことを今回取り上げたのは、当事者の感想の中にある「何がなんだか分からずに医師の出された薬を飲んでいて」という状況がとても多いのではないかと思えるからです。統合失調症の患者が体調不良を感じて医師にそのことを伝えると、医師は薬の量を変えたり別の薬に切り換えたりします。その際、医師は変えたことへの説明をある程度してはくれますが、患者は黙ってそれを聞くだけです。医師を信頼してというよりも、薬のことが分からないので質問もできないからでしょう。そうした状況に対して特集記事は「ガイド」の活用として次のように書いています。「ご自身の症状や悩みにあった臨床疑問を見つけて、そこを読んでみてください。そして実際の診察の場面にガイドを持ち込んで、先生に『こんなことが書いてあるのですがいかがでしょうか』と聞いてみてください」

「ガイド」の内容を具体的にお伝えできないので、あいまいな文章になっていますが、これからの「こころの元気プラス」誌の連載の内容を紹介することで補っていきたいと思います。また、この連載内容は書籍にもなっていますので発刊元に注文しておきます。(N.T)